

「まちのひろばフェス2022」発言者コメント摘録

日時：令和4年12月11日（日）14：00～16：30

場所：川崎市総合自治会館 大会議室（コスギサードアベニュー4階）

○オープニングトーク～SDCに期待すること～

《中村先生》

- ・別の所で使ったスライドで恐縮だが、その一部を使って限られた時間だが、ソーシャルデザインとは何かとSDCに期待したいことについてお伝えしたい。
- ・自分のキャリアとして20年近くソーシャルデザインに携わってきたが、「ソーシャルデザイン」や「社会デザイン」という言葉を使うと当初は「は？」という周りの反応だった。デザインというとファッションとかインテリアをイメージする人が圧倒的に多かった。
- ・「ソーシャルデザイン」とは社会をデザインするという観点である。
- ・社会デザイン学会の会長をやっているが、この学会は研究者だけでなく地域で実践的にやっている人もたくさん入っているが、「ソーシャルデザイン」についてあえて定義づけをしないでおこうというスタンスでやっている。
- ・なぜかというと、SDCがまさにそうだと思うが、SDCという場がどういう場なのか、それはそこに関わっている人達でつくっていくもの。誰かが先に枠組みを作ってそこに当てはめていくものではない。先に定義をつくとそこに合わせてやることになるので発展性がない。定義をつくらないことで、社会の状況に合わせて時代によって発展性がある。それが大事だと思う。なので敢えて定義しない。だが、説明はする。というスタンスでやっている。
- ・ソーシャルデザインで大事なものとして、「先義後利」という商売の言葉にあるとおり、先に「義」という理念や大義がしっかりあって、後でメリットや利益が生まれるという発想でないといけない。
- ・最初の森のスライドはこれを表していて、森は豊かな土壌があって、初めて木が生い茂る環境ができる。
- ・私達の活動でいうと、地域での様々な環境がないと、素晴らしい取組があっても独り勝ちはできない。環境があることで、その地域に住まう一人ひとりが豊かになっていく。この発想を忘れないようにしたい。
- ・他に大事な点として3つの視点がある。
- ・「鳥の目」は大空から俯瞰する大きなつかみ方。地球規模でみて私達の暮らしはどうなのかを考える。
- ・「虫の目」地べたを這う虫のように自分たちの身の回りから考える視点。
- ・「魚の目」流れを見通す目。今の時代の流れをみる視点。
- ・これが社会デザインで基本的な三つの視点と言ってよい。
- ・社会デザインでは「つながり」とか「関係性」「ネットワーキング」「コミュニティデザイン」といった言葉が大事になる。今はさらに、「クロスセクター」「クロスジェネレーション」という言葉が重要になっていて、世代間の断絶が色々なところで起こっている。活動を進める段階でもそういう断絶が起きていて、デジタルに強い若い世代と強くない世代など。

- ・社会課題とは昔から引き継いでいるものもありながら、新しい表現をしている社会的課題もある。例えば、貧困という言葉は昔からあるが「社会的排除（ソーシャルエクスクルージョン）」というような現れ方に今はなっている。必ずしも個人の責任でないに関わらず、あたかも合法的に排除されてしまっていることが起こっている。例えば、職に就けないとか、学びたいのに学ぶことができないとか、色々な機会を得られないことである。
 - ・こういうものに対しては二十世紀型の処方箋を持ってきてもうまくいかないことが多い。
 - ・従来の発想や方法論を変えてやっていく必要がある、それを机上の空論ではなく様々な人の知恵を集めて実践的にやっていく必要がある。
 - ・これが社会デザインの前半の部分の考え方。
-
- ・「デザイン」と一口に言ってもキレイなものを描いたり設計したりすることだけではない。
 - ・目的は人間の幸せ。「ハピネス」という主観ではなく、客観的に測れる「ウェルビーイング」ということを価値基準に考えている。
 - ・「ソーシャルデザイン」とは様々な関係性の調整行為。人と人や人組織、地域など関係性を編み直してちゃんと活かすようにすること。
 - ・パイプが詰まっていたり見なくなっていたり、従来は上手くいっていたことが上手くいけなくなり断絶や排除が起こりがちになる。そうすると経済的な格差だけでなく体験の格差が生じる。
 - ・様々なことを体験できるチャンスがある人となない人の差が激しくなってしまう。そこを何とかしたいというものである。
-
- ・SDC に期待することについて
 - ・SDC って聞きなれない言葉でそもそも何なのかとか、よくわからないと感じられていると思う。S・D・C だからスーパーダイナミックカルチャーとかソーシャルダイバーシティセンター色々あてはめることができるんだと思う。
 - ・地域の中で色々言えることができるので、ゆるやかに気軽に考えていいんだと思う。
 - ・地域ごとに課題や特徴が違う。そうしたことに対して、行政が設置して行政の施設でやるのではなく、民間との協働で一緒にやるという考えだと思うので、どうしたらそこに行き交う人達のコミュニケーションが活発になるか。
 - ・これまで詰まっていたパイプをどこをどうすれば風通しがよくなるか考えることが必要だろうと思っている。そして「従来まちづくりってこうだよ」という常識的な考えが、地域の皆さんや専門家にもあったらと思うが、SDC の場ではそれをもう一回組み替えていく必要がある。常識外れに思われるかもしれないけど、こういうことやると面白いのではとか、こういう見方もあるのではとか。こういう視点もあるのではとか。そういうことを平場でお互いが開きあう形で話せるかどうかが大事。
 - ・色んな要素が必要になってくる。「こうじゃなきゃいけない」という意見も出てくるだろうが、「いやいやこういう考えもありますよね」というのをどれだけ緩やかさを保ちながら言っていけるか。頑な意見を発言された方がどういう立場で課題を考えているかで変わってくる。
 - ・本日のディスカッションで今日を1つの中間のスタートとして、「こういう場でありたいよね」とか「こういう場にしたいよね」ということが出てくればいいなと思っている。

○市民自治の視点から SDC を語る

≪小島先生≫

- ・10分では話しきれないが簡潔に伝えたい。
- ・「市民自治」という言葉は「自治」という言葉と「市民」という言葉がつながって成っている。
- ・「自治」というのは人類史の始まりと同時にあるもの。柔らかく定義すると、自治とは人々が社会を営むための知恵である。
- ・色んな自治があるが例えば「祭り」がわかりやすい。千葉県佐原市には日本遺産となっている大祭があるが、江戸時代から続いているもの。この土地は水害が起こりやすいため、水害が起きたときに皆で力を合わせるためのトレーニングとして行われてきた。また、自治を次の世代につなげていくためのトレーニングとして、若い世代を参加させて色々なアイデアを出させることをやっていた。これは典型的な祭りという自治で世界中にある。
- ・市民が登場して市民自治という言葉が誕生した。遡ると、古代ギリシアでは奴隷制度前提のものであるし、中世ヨーロッパは商人たちによる自治が発展していった。近代になって市民革命がおきて、現在も世界中の50%以上の国で普通の人たちによる民主主義による自治が行われている。
- ・川崎市の自治基本条例があるがその中に市民自治が書かれている。難しい話は飛ばすが、その内容の基本は人々の間の自治的な営みであり、その上で市長を選び市政をやる。市長は国に対して対等な関係で市政を運営していくということが書かれている。
- ・その第9条で市民自治の舞台としてのコミュニティを尊重すると書いてある。市民の自治が輝くようにお膳立てしますというのが、今回もテーマになっているコミュニティ施策である。
- ・SDCって何なのか。皆で画を描きやってみる場所だと思う。この施策で「希望のシナリオ」があるが、誰かデザイナーがこの絵を描いたものだと思うが、このとおりにするとソーシャルデザインにならない。皆で絵を描きやってみる、これがソーシャルデザインかなと思う。
- ・今この場でみんなで絵を描いてやってみるというのができれば体感できたかもしれない。
- ・SDCができたらどうなるか。そこに集まった人達が楽しいだけで終わるかもしれない。もしかしたら、少しまちが変わるかもしれない。もしかしたら、まちが大きくかわるかもしれない。もしかしたら、世界が変わるかもしれない。
- ・そんなわけないと思うかもしれない。だが、「バタフライエフェクト」という言葉がある。ローレンツという気象学者が提唱したもので、ブラジルで蝶が羽ばたいたらテキサスでトルネードが起こるという仮説である。そんなことが本当に起こるかはわからないが、たった小さな出来事でも色々な要因が重なって、そこが連鎖して様々な動きが出てきてやがて大きな出来事となる。これが「バタフライエフェクト」である。
- ・日本でもそんな例がある。こども食堂である。市民自治の中からぽっと東京で生まれたもの。今や全国で6,000か所ほどもある。
- ・これが自治体の施策だったら上手いかなかっただろう。市民の中から生まれた取組だから「もしかしたら私にもできるかもしれない」で全国に広がっていった。
- ・いろいろな区の皆さんがやったことが、もしかしたら、ちょっとずつまちを変える、世界を変えることになるかもしれない。
- ・ビッグイシューとかも世界中に広がった事例である。皆さんのアイデアが世界を変えるかもしれない。バタフライエフェクトである。
- ・「かもしれない」と言ったがそれでいいと思っている。SDCでやることって「かもしれない」を目

指すものだと思う。行政がやるものは「かもしれない」だと困る。そんないい加減でいいのかと怒られる。だが、市民の皆さんがやるのは「かもしれない」でよい。

- ・「ちょっとまちが変わるかも」、「大きくまちが変わるかも」、「世界が変わるかも」。自分の区でちょっと皆さんがやったことが世界を大きく変えるかもしれない。
- ・こども食堂が何故大きく広がったと思うか。それは共にご飯を食べるというのは根源的だからである。共食というのは社会を変える根源的なものであり、貧困に苦しむ子供たちにご飯を食べさせてたいという思いからどんどん広がっていった。
- ・「ソーシャルデザイン」と似た言葉で「ソーシャルイノベーション」という言葉がある。こちらも定義ないが、社会や世界を変える方法を変えるというものである。
- ・行政の皆さん優秀だが、法律や条例や予算に縛られ、頭が固くなってしまい引き出しが限られてしまう。ところが市民の皆さんは色んな引き出しを持っている。
- ・ソーシャルデザインセンターから「世界を変える方法」が生まれるかもしれない。
- ・市民創発というのはまさにソーシャルイノベーション。
- ・ソーシャルデザインセンターって何か。「かもしれない」と思う人が集う場所である。
- ・かもしれないを目指すことを「ゲッティング・トゥー・メイビー」と言う。
- ・SDC とは、「かもしれない」を目指す夢や思いを持った人達が知恵を出し合う場所である。そのくらいでいいのではないか。

SDC トークセッション 「希望のシナリオ」実現に向けて～SDC の果たす役割～

《SDC の価値・期待することについて》

中村先生

- ・先ほどお伝えしきれなかった、SDC に期待する点について5点お伝えしたい。
- ・1点目は、越境型学習というのを期待したい。自分の居場所ではないところに連続的にちょっとだけ足を延ばして、ボーダーを超えるというもの。
- ・2点目は、なぜ目新しい言葉を使うかという点。「外連」というちょっと目を引くような仕掛けをすることで、「何だろう」と多くの人の興味を引き付け、色んな人が入ってくるようになる。そこに期待したい。
- ・3点目は、行政が関わる意味はどこにあるのかという点。民間でできることはたくさんある。そこにあえて行政が関わることの意味は何なのか。それを市民の目の高さから、SDC という場で行政が関わる意味をどんどん挙げていくとよいと思う
- ・4点目は、課題解決というよりも課題の発見共有が大事。それを地域ごとに関わる関係者によってやっていって、それを基にどう課題に取り組むかという道筋がよいと思う
- ・5点目は、デジタルの活用について。デジタルがすべてよいというものではないが、便利になっている面がかなりある。通常はデジタルトランスフォーメーションという言葉だが、デジタルソーシャルトランスメーションという「ソーシャル」という観点を入れたいと思っている。DAO や NFT という言葉があるが、本日はお話しする時間がないので、私のやっているニッポン放送でおしゃべりラボ～しあわせ Social Design～という番組で話しているので、興味があれば聞いて欲しい。

小島先生

- ・市民が踊る。SDC は行政に踊らされてはいけない。市民が主体となるものである。これは私の言葉ではなく、30年くらい前に鳥取の米子に行った時に聞いた言葉で、市民は踊っていてそこに行政がついてこられるかである。
- ・つまり行政がSDC に踊らされる。こうなったらSDC は本物である。今は立ち上がったばかりでSDC はすごく健康的であるが、5年10年たったときにどうなるか。NPOもそうだったが、だんだん高齢化してきて元気なくなってくる。同じ人間が踊り続けることもできないので踊り手を育てるということも大事
- ・もう一点、SDC だけで全部やろうと思わないでほしい。そうなのは意味がない。SDC からどんどんあふれださせることが大事。コップに水があってどんどんあふれさせる。水面にポチャンと水滴を落とすと波紋が広がるイメージ。その水滴を落とすのがSDC の役割。「SDC 卒業して会社を始めます」とか「何かやります」とか、学んだ学生が「就職先を変えます」とか。そういうのが出てくるとおもしろい。
- ・企業もプロボノをやってみたりしている。社内だけじゃイノベーションが起きにくいから、「外に行け」「遊んで来い」とやっている。会社の中だけで完結できないものは外にいったよいということ。
- ・SDC だけでずっと抱え込まないことが大事。完結できないものはあふれさせてよい。あふれ出すということは、新しい人がまた入ってくることになる。そうすると新陳代謝もある。いつまでもこの地域の中に踊っていて、踊りたくなるとそこいけば踊れるよという場所になるとよい

呉先生

- ・SDC って何だろうって思う方もいるかと思うが、ちょっと運営サイドのマニアックな話になるが、ご容赦して聞いていただきたい。

- ・人と気持ちをどうやって耕していくのかが大事。一方で、場所と事務局も大事。この二つのバランス感や塩梅が大事だと感じている。
- ・予算がついて場所があって事務局があると安定感が出てくるが、逆に人と気持ちが踊らないということが起きそうな気がする。人と気持ちが盛り上がるのが大事だと思うが、それだけだと安定した基盤がつかなくて、場所や事務局も欲しくなる。だが、場所と事務局を強くすると事務局任せになってアクセスしやすい人だけの閉じたコミュニティになってしまうという懸念がある。
- ・最適解を示せるわけではないが観点として、このバランス感が非常に大事である。
- ・SDC に期待することとしては、耕すこと、耕し続けることが大事。いかにして人と気持ちを耕し続けること、いい意味で落ち着かないで、薪をくべて火が付いたら、また薪をくべて、誰かひとりがくべるのが大変なら順番にやり続けること。
- ・市民活動や地域活動で一番大事なものは、人の気持ちがしっかりと盛り上がるのがベースで、そのあとに「側」としての事務局とかがついてくる。
- ・7区色々な取組がある中で人と気持ちを耕し続けるということが大事な観点だと思っている。

橘先生

- ・立場や活動内容が違う人同士が、つながる場になると良い。もちろん、同じ立場や活動内容の人がつながることで素敵なことが起こると思うが、地域限定だからこそ、地域の方が集まる場からこそ起きることがある。「楽しい」が広がる関係づくりに期待したい。
- ・深刻な課題など、真剣に取り組まなければいけないことがたくさんあるが、どんな課題であっても、「真剣に取り組むこと」と「楽しい」は共存できると思う。
- ・「楽しい」がつながる関係づくり、その関係づくりの方法も何度も作り直すことができるとよい。
- ・今はSDCのスタートの時期だから「続けるための仕組み」を考えるが、5年10年経つとその仕組みは、新しい人が入りにくい仕組みになっているかもしれない。社会の状況も1年2年で大きく変わるので、SDCの仕組みもすぐに時代に合わなくなるかもしれない。
- ・作り直しながらSDCが運営される。そして、常に新しい人が入りやすい、楽しい関係づくりや様々な人が関われる場になることを期待している。

後藤先生

- ・うれしい×共感を育む。川崎市には地域包括ケアシステムがあり、障害があっても、高齢で要介護や認知症になっても、住み慣れたところで自分らしく生きていく、というのを応援してくれる。これは介護保険サービスだけではなく、地域にある公園や自分が立ち上げたこども食堂に、認知症になっても通えるようにしたり、周りの人も一緒に応援していこうというものである。地域にある資源を包括的に暮らして支えて、支えられて生きていこうというのが地域包括ケアシステムである。
- ・寝たきりでも車いすでも若い人で精神的に病んでいても、学校に行きたくなくなっても、暮らしの中に「うれしい」と思えることがあるとよい。だけど、その「うれしい」という思いが、なかなか「そうだよね」「同じだよ」という共感として育まれない。一週間に一度でも嬉しいと思ったことが、地域の中でつながって、育まれるとよい。
- ・川崎市民の9割が「何か困ったことがあれば他人を助けてもよい」と答えているが、自分が困った時に助けを求めるのは7割が家族、3割がケアマネージャーである。近所の人に頼りたい人は5%しかいない。お互い様になり切れていない。まちの中に色々課題があって、まずは簡単なことから家の周りにベンチでも置いてみようかと、なるとそれは道路占有許可が必要という話になる。
- ・近所で気軽に「こんなことがあってうれしかったな」ということに対して、地域に暮らす人が「そ

うということだよね」「それ大切だよね」というのが上手く育まれる地域になると良いし、SDCにすぐ期待したいところである。

- ・別の自治体の話だが、おにぎりアクションというのをやっている方がいる。すでに70歳を超えている方であるが、その方が中学校の時に、弟が遠足に出かける日に家庭内のいざこざでお母さんが家出してしまった。これじゃ校外学習にいけないと弟が泣くので、その方が大きいおにぎりを作った。これを弟が60を過ぎた今でも、あの時の兄さんのおにぎりは本当に嬉しかったとずっと感謝している。本人はそれなりの会社の偉いポストを務めた人だけれども、その肩書には固執せずに、自分が嬉しかったことを、地域のために何かやりたいと思っている。SDCにはこういう思いを受けとめてほしい。一方、話にはオチがあって、突然役所の人が出てきて「こども食堂でこどもが困っているからおにぎり30個握ってください」と言われた。「それは違うだろう」と腹が立ったという話。
- ・役所の政策としてやらないといけないものはあるけど、一人一人個人がこういうことをやりたいと思っていることに対して、政策でいくとトラブルがある。個人の発意を無視するのはよくない。個人が色々な思いを抱えながら、工夫してカフェをやったりこども食堂をやったりしている。そうした状況を、「個人が勝手にやっている」ことだからという判断で済ませてしまうのも、悲しい。
- ・特定の個人が嬉しいと思ってやっていることでも、何か地域で共感を育むとつながることがある。それを役所の施策のど真ん中におくのは難しいけれども、役所としてもそれを見えるか見えないかの範囲で理解しておくことが大事ではないか。
- ・嬉しいとか共感というのは、とても個人的なことなのだけど、「社会的に無視していいんですか？」ってことに対して、川崎市の志としては、「それは良くないよね」というものだと思っている。

《SDCへの悩みに対して～運営に関する持続性等～》

中村先生

- ・他地域の事例、三鷹市と青森市の事例を簡単に御紹介したい。
- ・三鷹市では、通常市が原案を作成する市の基本構想について、順序を逆にして、市民の中から約400名の公募委員によるまちづくりに関する会議体を作り、ここと三鷹市がパートナーシップ協定を結んで、お互いの役割と責務を明確にして、先に住民側から基本構想の案が出た。これを最大限尊重して市で内容を検討して、議会での議論を経て、基本計画、実施計画に進んだという事例がある。これは画期的で各地で視察が相次いだ。市民と徹底的に付き合っ、敷地内にプレハブをつくってそこで夜中まで議論していた。
- ・三鷹市はこれに満足することなく、16万人の内の400人だと代表制があるのかという問題があるので、サイレントマジョリティの意見を取り入れることも行った。海外のドイツのやり方をアレンジして、まちづくりディスカッションというのをやった。無作為抽出で、会議に出てきてもらって、福祉とか環境とか地域政策について議論する。
- ・これはやってみたら非常に面白かった。多様な意見が出てきた。普段会議に出てこないが、機会があったら言いたいという市民の方の声を拾うことができた。
- ・三鷹市は町内会・自治会とは別に住民協議会というのを7つの住区につくっていて、そこがコミュニティセンターの運営をしてきた。ところが、段々と高齢化して、NPO等新しいテーマ型のコミュニティも出てきた。そこが上手くかみ合わなくてってきた。そこで、メタネットワークとして、今は市民協働センターという名前に落ち着いたが、あらゆる市民の組織をつなぐセンターをつくった。未だに発展途上だが、おもしろい機能を作っている。
- ・長くなったので青森の事例はまた時間があったら話したい。
- ・運営のところでは現場性と、現場を離れて議論する場、これを往復することが大事だと思っている。

- ・各地でどうするかロジックモデルを作ることが大事だが、この議論だけだと机上の議論になりがちなので、現場といたり来たりする。ワークショップを積み重ねて小さな成果を積み重ねることが非常に大事だと思っている。

小島先生

- ・夜のパン屋さんの事例。ビッグイシューのビジネスモデルが厳しくなってきた。その中で新しいビジネスとして、夜のパン屋さんというのが神楽坂で生まれている。まちのパン屋で売れ残ったパンを集めて、かぐら坂の本屋の前でホームレスが売るというもの。これがホームレスにとって次のステップにつながっていく。ホームレスと消費者が出会う場になるし、これも知恵である。
- ・郡山に主婦の方が始めた「NPO法人しんせい」というのがあるが、「障がい者を地域の戦力へ」という観点で一色々なことをやっている。例えば、お一人様の高齢者に障がい者が行って、対話のケアをする側になるというのをやっている。
- ・企業が作業所に協力したいと思っていて、作業所に何か発注したいとしても、作業所自体は小さいので、大きな企業から発注されても作業しきれない。そこで、13の作業所をネットワークにして、作る場所、箱をつくる場所、販売する場所などと役割分担をして、企業からの受注を受ける。大きな企業はSDGsで協力したいけど、器が違い過ぎる。だったら小さい事業所をネットワークすれば色々なことができるのではないかという発想である。
- ・他にも「山の学校」といって、農福連携として、障がい者ににんじんカレー作ってもらいつつ、今度は企業に都会から勉強に来ませんか、障がい者が農福連携でやっているところに対して、勉強しませんかと誘って、そこでお金を落としてもらう。それは楽しいからできるものだと思う。
- ・普通の主婦が始めた事例だが、これは誰もがソーシャルデザイナーになれるということだと思う。
- ・妄想することが大事で、妄想力・直観力は構想力につながっていく。
- ・右脳志向で誰もがデザイナー。大学の先生って左脳で難しいことを考えているが、右脳のアートのようにイメージする力が大事。右脳でもってイメージするそれが一番大事。ひらめき。これがSDCのそういうことが自由にできて、そうすると各SDCで色々なアイデアが出てくると思う。

橘先生

- ・「持続可能な運営に向けて、モチベーションを維持するにはどうしたらいいか」という質問に対しては、二子玉川の事例がある。二子玉川の町内会で100年懇話会という会議を月に1回やっている。町内会のほか、地域の活動団体や企業も一緒に情報交換するだけの会だったが、そこで顔を合わせていくうちに、参加者のやりたい人が新しいことを「プロジェクト」として実験的に実施するようになった。町内会は、プロジェクト実施のために必要なことかと思ったり、助成金を出したりしながらプロジェクトを応援する。
- ・面白いのは、プロジェクトの実施後である。継続するものもあれば、卒業するもの、独立して別の形になるもの、終了するものもあるという点。普通は、継続するためにはどうするかという思考になると思う。しかし、ここでは継続だけではなく、様々な卒業先や広がり先があることにより、やりたい人の更なるモチベーションや、やりやすさのハードルの低さになっていた。狙ったわけではなく、結果として継続が上手くいった事例である
- ・ここでキーワードになるのが「実験」。やめてもいいという前提でスタートできるということ。もう一つは「様々な広がり先」。ここでずっと実施することを考えなくても良いということ。この2つ。
- ・自分が参画したとか、自分が楽しいとか、自分が考えたことが少しでも実現できることが、参加者のモチベーションにつながる。先ほどもSDCの仕組みが作り直せると良いと話をしたが、こども

同じである。そうしたものを意識すると参加者のモチベーションにもつながる。

呉先生

- ・卒業先と広がり先っていい言葉だと思う。やめる・終わるがいい塩梅で許容される・歓迎されるというのが、持続性にとって大事なことだと思う。新しくあり続ける、小さなチャレンジがしやすい。続けることは大事なことだが、そればかりが評価されて、継続されないことが評価されないということになってしまうと、チャレンジもしづらいし、古くなってしまうこともある。
- ・持続可能性についていうと、理事会と経営チームということかと思う。NPO のようだが、軸となる会議体を二層設けるのは一つの技かもしれないと思っている。
- ・理事会は連続性と中長期性。SDC 自体が無くなるのはちょっと残念だが、SDC で生まれたプロジェクト自体は、卒業したり広がっていくのは歓迎されるかもしれない。中長期の連続性を担保する会議体やチームと、新陳代謝をしながら短中期をやっていく会議体やチーム。そこがゴチャッとするとどっちつかずになってしまう。新陳代謝がない中長期、連続性は担保されるけど、というのも良くないし、あまり 1 年更新でガラガラと変わってしまうと、それはそれで連続性が担保されない。中長期で連続性が担保されるものと、短期で新陳代謝を起こすような動力を分けていくというのは考え方かなと思う。

《SDC への悩みに対して～外部からなかなか理解されない等～》

後藤先生

- ・大きくはやり方二つある。1 つはうまくいってないことを皆で話し合っ、上手くいかせるというやり方。
- ・長野市の児童遊園のトラブルなんかは SDC があつたら解決されたのではと思う。
- ・公園は国土交通省の管轄で、児童施設自体は文部科学省の系列で、学童保育は厚生労働省で、騒音対策は総務省。
- ・児童遊園を運営している学童保育さんが、近所のトラブルに対して対応できない、たぶん自分たちの学童の予算ではリソースを割けないということだと思うし、それは理解できる。
- ・近隣の人達は 18 年間騒音に悩まされていたと言うが、農地を開墾したようなところに家がバラ立ちしているような場所だったら、18 年もあれば地区計画をかけて、しっかりした公園を取るというまちづくりをやろうと思えばできたとも思う。
- ・勝手なことは言えないが、皆が、自分達ができる範囲だけで済ませていたから、結局「公園やめます」という話になってしまった。役所も「残念です」と言っているが、その地域の方と SDC のような場で話し合ったのだろうか。住民のほうも普通の街区公園よりも小さい公園なので、この場所に作ったらトラブルになるのは最初から分かっていたようだし、どこかで 1 回話し合えばよかったと思う。
- ・SDC があれば、こういうトラブルに対しても、答えはでないけど、まずは議論のまな板に載せましようということができたのではないかな。こういうトラブルが庁内横断・産官学民を超えて上手く議論できると、「SDC ってそういうことをやりたかったのね」と半分くらいは理解されるのではないかなと思う。
- ・ただ、このようなトラブルを解決するというのは大事でわかりやすいが、そもそも SDC は平均的な成功体験を狙っているのだろうか。そもそも現代的には平均的な困りごとは役所が政策にして対応している。(先ほどのような制度の狭間に落ちることはあるとして)
- ・本当に 4~5 人が面白がって始めたカフェだとか、最初は 6~7 人の仲間で始めたバザーでお弁当を販売していたのが、恒常的に配るようになったものとかは、平均点を取れる話ではなくて、共感

してくれる人が2~3人いるという話なので、平均的に理解されない方が好都合なのではないか。理解されないからSDCが必要となるという面もある。

- ・理解をしてもらうとするのは、役所の政策評価や、平均的な評価をしてもらおうとするからである。そうした評価に乗らないものだからこそ価値がある。そこをどう評価するのかという点を議論していかないといけない。単に優れた賞がもらえるものを目指してしまったら、そもそもソーシャルデザインじゃなくなる。
- ・かなり限定的な状況があり、たとえば2~3人しか行かないこども食堂があって、しかしそのこども食堂が無くなった困る人が数人いる。そのような問題に対してみんながアプローチしていることに対して、それをどう政策評価・事務事業評価の対象するのか。役所の人もそれを見に行くのを業務にできるのか。そんなことをするなら「窓口の待ち時間減らせ」、「税金やすくしろ」という人は必ずいる。会計監査で指摘されるかもしれない。そうした声に対して、「いやそれも大事な事ですよ」というのを、ここにいるメンバー皆で「メインの施策にはならないが、それって大事だから役所の人にもやってもらおうよ」と、応援団が外から言い続けられないといけない。外部の人には理解されないところの良さがある。だからこそ皆が応援し、大事だと言い続けられないといけない。

小島委員

- ・理解されないということは、ソーシャルイノベーションとかソーシャルデザインとかによく出てくる話である。こうしたことに対しては鈍感力と直観力が大事。矛盾しているが、ある部分鈍感で、ある部分敏感でなければならない。
- ・ファーストペンギンというドラマがあったが、一介の主婦のソーシャルイノベーションの話で、おさかな宅配サービスをやろうとして周りから理解されずにもがいている話。
- ・ある種鈍感力がないと病んでしまう。色々なイノベーターが言っているが、横須賀市の漁港で新しいことをやろうとした人がいたが、周りから色々言われて大変だったことがある。そういう時に「あーそうですか」という鈍感力がないと行き詰ってしまう。
- ・一方で、周りのことをよく見る敏感力も必要。
- ・理解される必要はないと思う。周りの人から最初は理解されないものである。大体の人はしらっと見て黙っている。失敗したら「ほらやっぱりね」と言ってきたり、成功したら逆に手をつなぎたがる人がでてくる。世の中そんなものである。
- ・鈍感力と敏感力を併せ持ちながら自分が思っていることを愚直にやっていくことが大事。
- ・先ほどの長野の事例があったが、あれは行政の役割だと思う。東京都では騒音の種類からこどもの声を除いた。東京都では「こどもの声は騒音ではありません」としっかり言っている。
- ・保育園の参入規制が緩和されたから、園庭のない保育園が増えた。園庭がある保育園ばかりだと、バスに乗って園庭で遊んでいるだけだけど、まちの中にこども達の姿があまり出てこない。色々なところに保育園ができると、こども出てくるので、その風景をどう生かしていくのか。自分の周りでもそうだが、こどもが遊んでいる風景は癒される。その風景を敏感に捉えながら、子どもたちがまちにいる風景をどう作り出せるのか。今ある風景の中から何を見つけ出していくのかということに、わくわくしていくことの方が大切かと思う。だから鈍感力と敏感力両方持つことが大事。

中村先生

- ・ソーシャルデザインというのは素朴にいうと、「常識を疑う」というところから発している。これまでのフレームや、やり方はそれでいいんだろうかと。「普通こうでしょ」という普通という言葉は呪文のような魔力があって、皆がそこに反対してはいけないような雰囲気がある。「いやでもちょっとここおかしくないですか」という意見から、色んなことが開けるとというのがソーシャルデザ

インだと思う。

- 例えば、先ほどの長野の件でいうと、よくよく色々みると、文句を言ったとされる方、こどもの声がうるさいというのも言っているが、それは一部でメインは親が車の騒音がうるさいとかその類の問題提起だったということらしい。
- これは一種の切り取り問題。メディアが最近よくやる一部を切り取って争点化させること。
- ソーシャルデザインを考える際に、地域の色々な問題に対して、これが問題だ、課題だとなったときに、もちろんその問題提起は大事だが、「いや、そうか」と、ひょっとしたら少し広い観点とか別の観点から見たら別の課題でもあるのではないかと、ひょっとしたら解決の主体も今まで普通に考えていたところと違うところにいるのではないかと。「あれっ」と思う、普段とは違うちょっとした疑問、ここを考えるのがソーシャルデザインで大事なポイントだと思う。
- 私たちが通常こうだと思うこと、例えば、高度経済成長時代は大きいことは良いことで、マスマーケティング的な物事で考えられていて、行政もその考えに毒されている部分があった。最近は限定的な人が提案して、限定的な人しか買わない、というもののほうが企業の注目が高い。ある地域の女子高校生がおススメするソフトクリームが出たとすると、そこだけ女子高生がすごい行列になる。何だろうと男子高校生も興味を持つ、それから、限定されているので食べてみたいと皆が興味を持つ。
- これはビジネスの話だが、地域課題に置き換えると、地域で限定的な人が限定的にしか感じていない課題に対して、これまでは「そんなのは個別的な課題だから全体ではいいでしょ」というのになっていた。だが、ひょっとしたらその中に大事な問題がはらまれているかもしれない、そんなことを色んな人達が議論に取り上げて、ちょっとこれまでの常識の枠組みとは違う議論もしてみる。そんなことが可能になるSDCであってほしいなと思っている。

《会場からの質問》

○質問1

- 自分は起業を目指していて、「まちづくりカフェたかつ」に参加して、色々な人に話を聞く機会に恵まれた。何からスタートしたらよいかわからなかったが、仲間が増えてよかった。
- 小島教授の「バタフライエフェクト」の話に勇気をもらった。
- 鈍感力の話で、私からの提案だが、自分は企業で小売業の店長やっていて並行してまちづくりもやりたいと思っている。自分なりの1つの解として、自分のやっていることだけに集中しないことが大事ではないか。
- まちづくりがうまくいかない時は、メインの仕事で集中する。メインの仕事で上手くいかないときはまちづくりの活動に集中する。こうしたことが一つの解になるのではないかと思う。

小島先生

- その通りだと思う。鈍感力って、それだけに集中すると嫌になってしまう。自分もフィールドワークとして、集落のお祭りは高齢化して担い手がないから学生を連れて行ったら、そこの若い衆が学生に喧嘩を吹っかけてきた。「お前たちが来るから俺たちが半端な存在になるんだとか」とか。これはどうしたらいいのかみたいな話はある。
- そこで鈍感力がないと、もう辞めたとなるが、「集落の若者たちもすごい葛藤しているんだな」と捉え直して、そのうちなんとかなるさと。ゲッティング・トゥー・メイビー、「かもしれない」でいい。
- 自分のやってきたことが、自分が生きている間には芽が出ないかもしれない。自分のこども達の世代とかそ次の世代で花を咲かせてくれるかもしれない。そのくらいの気持ちでいないと、何かを変

えることはできない。そのうち何とかなるさ、ゲッティング・トゥー・メイビー、そういうマインドでいることが鈍感力。

- ・趣味とか色々なものを持つ方がよい。テレワークになって色々遊んでいるおやじが増えたという話を聞いた。会社のこと以外にも考える余裕が出てきている、人生の中で色んな引き出しがある方がよい。

○質問2

- ・コロナの前は結構地域のことを色々やっていた、コロナで一回家に閉じこもって元気がなくなったのを今復活させようとして頑張っている。鈍感力の続きになるが、自分は仲間づくりが得意ではなかったが、仲間づくりするよりも黙々とやっていたら、誰かが見ている仲間になってくれたらいいと思う。だが、思いのほかフリーライダーが多い世の中で、結構一生懸命頑張ってやっても、言葉では色々いただくが、なかなか仲間が増えなくて結局みんなフリーライドするんだなということを感じる機会が長くて、コロナもあって心の炎が小さくなることもあった。
- ・だけど、SDC に来て色んなことをやってる方がいて、今日も仲間ができたり、本当にこの仕組みは大事だと思う。
- ・自分のママ友など同世代の方に広がってないのは残念だと思う。いわゆる意識高い系だけではなく、普通に生きている、半径3メートルくらいで生きている方にどうやったら届くのか、教えていただけると嬉しい。

呉先生

- ・難しいけどすごく良くわかる。コロナがあることで、オンライン化になることで、すごく生き生きする人もいますが、自分の勝手な感覚的な統計では、6~7割の人は心の炎が燃え切らなくてくすぶっている状況だと感じている。
- ・解決策がパキッと出るわけではないが、SNSの時代だからこそ外に広がるという力だけではなく、理解しあえる数少ない、どちらかというとネガティブで、愚痴っぽく、もしかしたら誰かを批判する言説も含めて話せる、ちょっとクローズドで愚痴言い合える仲間を確保するということが大事なかもしれない。
- ・外に広く出ていく一方で、人間だから傷つく部分が、こんなこと言ったら皆からそんなこと思っているのと思われてしまう部分があると思うが、私も16年代表をやっているので成人君子ぶっているが、いいイメージを自分の中で大切にしたいと思う一方で、その光が闇をつくる部分もあるので、その闇の部分シェアできること。特に地域活動、市民活動、NPO活動は理解されづらいので、家族からも理解されないこともある。世の中理解されないことが多いのが基本構造。
- ・でも10,000回駄目でも10,001回目頑張るみたいな、そのためには心が折れないように、火が消えないようにちょっとネガティブな話ができるセーフティな心理的安全性の高い仲間をつくるということを同時に兼ね備えることが大事だと思う。そこが絶えなければまた、世の中に声を出してあげる。世の中の外に働きかける力と、人には言えない悩みを言える場を備え付けるというのが、コロナ禍だと大事だし、これからも大事になってくると思う。

橘

- ・「自分の周りの人が理解してくれない」は、よく聞くことがある悩み。理解してもらおう先を、同世代のママ友だけではなく、例えばシニアや若い人にも広げてみてはどうか。
- ・SDCは多種多様な人が集まっている。今まで「伝わらない」と思っていたことが、違う層には伝わる可能性もあり、そういう可能性を探る機会にもなる場だと思う。

- ・また、周りが理解してくれない時には、理解してくれないのだと割り切って、サードプレイスのものを増やしていくと良い。前向きになり、活動を生き生きとすることができたら、その様子を見て周りの人が理解してくれる可能性がある。
- ・かつて、市民活動に行く私の様子を見た父が「何の意味があるのか」と言っていた。その後、引退した父は、趣味の囲碁を通して地域への理解が深まり、今は地域活動に興味を持つと言い始めている。このように、今は理解してくれない人も、人生のフェーズによって理解が変わるかもしれないが、今は、別の層にも理解を求めてみるのが解決の方法の一つになるかもしれない。